

<第1回> 地域医療の充実に向かう道標

自治医科大学 地域医療学センター長
梶井英治

<ご略歴>

1978年に自治医科大学を卒業。鳥取県立中央病院でのローテート研修を経て、地域医療に従事。その後、母校に帰り、幅広い研鑽を積み、1998年に地域医療学教授、2001年から総合診療部長を兼務し、2008年4月より地域医療学センター長に就任。現在、総合医の育成、そして地域医療に関わる研究活動に従事しながら、地域医療の充実へ向けて地域における啓発活動に取り組んでいる。



はじめに

わが国における医学の進歩と社会経済の発展は、わが国を世界一の長寿国とした。さらに、医学の進歩は、医療の世界に様々な技術革新をもたらすとともに、生命科学の大進展へとつながり、国民の医学・医療への期待は膨らみ続けている。

その一方で、急速な高齢化およびそれに伴う疾病の慢性化・複合化が進み、介護を要する人も増加の一途にある。国民の健康を取り巻く状況は大きく変化し、医療には治療をすることに加え、幅広い役割が求められるようになってきた。

このような現状の中で、安心して健やかな生活を送ることができるように、住民を見守り支援する地域医療の役割は一層大きくなってきている。日本の医療の将来は、地域医療の向上・発展にかかっているといても過言ではない。

しかし、医師不足などによる地域医療提供体制の確保が困難になり、地域医療の崩壊が危惧されている。

そこで自治医科大学では、安心して暮らせる医療づくりを目指して、地域医療を取り巻く様々な課題を明らかにし、その改善・解決策を提言することとした。まず、課題抽出のために、マインドマップの作成と課題のカテゴリー化を行った(図1)。カテゴリーごとに議論を積み上げ、提言として取りまとめ、『地域医療白書第3号』¹⁾を刊行した。また、地域医療の課題について、行政関係者、保健・医療・福祉関係者、医育機関関係者等が一堂に集い、医師をどのように育てるか、医療提供システムをいかに再構築していくか、について考える「地域医療フォーラム2011」を開催した。同フォーラムの最後にフォーラム宣言が発せられた²⁾。これらの議論や提言も踏まえながら、地域医療の現状と充実に向かう道標について考えてみたい。

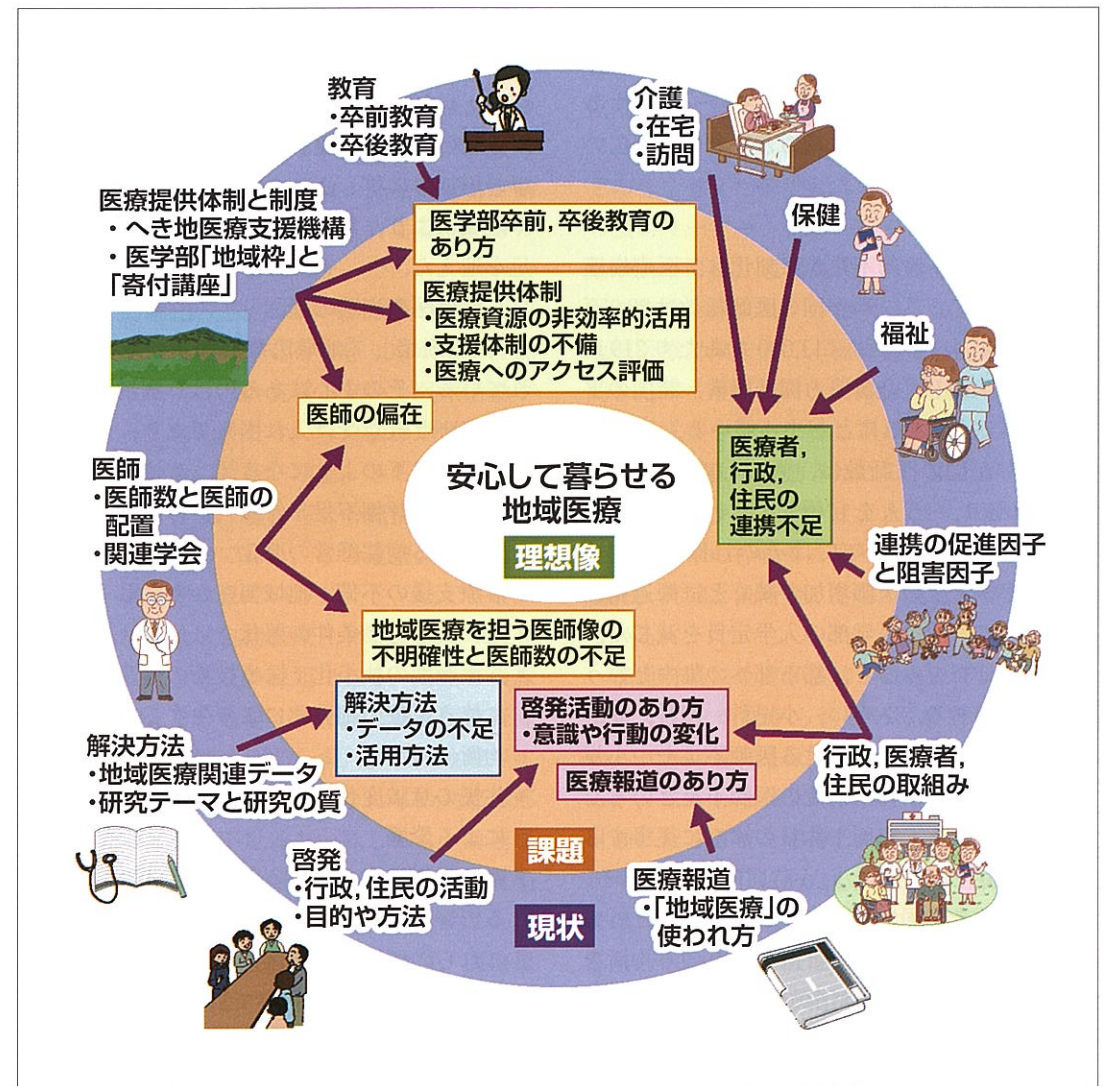


図1 マインドマップ作成による地域医療の課題抽出とカテゴリー化
(『地域医療白書 第3号』ダイジェスト版より)

1. 地域医療の現状

1) 高齢社会における医療の役割の変化

国民の寿命は世界のどの国も経験したことがない速さで進展し、わが国は高齢社会を迎えた。この急速な高齢化に対して、医療のみならず、保健、介護・福祉のすべての分野において、対応が遅れた。救命はもたらされたが、その後の

身体機能回復や生活の質の確保・向上というところまで体制づくりが伴わなかった。その結果は、「寝たきり」という言葉を生むことになった。医学の進歩は、医療の高度化をもたらした。医療の細分化を進め、専門医を輩出することになった。国民の志向は、専門医そして大病院へと傾倒していった。一方、わが国の国民を取り巻く健康問題をみると、急速に高齢化が進み、急性

